

維持管理の広報活動に関する一考察～大人のアスレチック～

福岡北九州高速道路公社 正会員 ○片山 英資
株式会社特殊高所技術 山本 正和
NPO 法人福岡テンジン大学 岩永 真一

福岡北九州高速道路公社 正会員 藤木 修
西日本高速道路エンジニアリング九州 江口 智裕
NPO 法人福岡テンジン大学 長谷部雄一

1.はじめに 維持管理の重要性に関する認知度は、近年高まりつつあるが、依然として不十分な状況にある。そのため、維持管理の現場においては、工事に対する理解が不足していることもあり、苦情による工事の一時中断が多発する。また、社会的に重要なインフラを適切に維持管理するための投資増加に対しても、否定的な内容で報道される事も多い。その結果、土木技術者の魅力の減少をもたらし、若手技術者の人材難などの問題が顕在化している。その一因として、我々土木技術者の広報の質と量が共に不足している事が挙げられる。そこで、維持管理の重要性を伝える広報活動の一環として、市民と共に体験し意見交換を行う取組みを異分野の NPO 団体（以下団体）と共同で実施した。以下にこの取組みの内容と考察を記載する。

2.企画の着眼点と実施内容 土木技術者が主催するイベントは、一般的に以下の傾向が強い。①タイトルが堅苦しく、参加する動機が見出しにくい。②言いたいことを一方的に伝えるだけの催しとなる。③サービス精神が不足しており、おもてなしの心が足りない。これは、企画段階での市民目線での配慮が足りない事が大きな要因と考えられる。そこで、「福岡を、世界でいちばん魅力的な街にする」というビジョンを掲げ、人の繋がりによる地域文化の醸成と発信を促し、地域・企業・個人の情報発信の活性化を図る活動を行う団体と共同で企画・運営する事で、これら負のイメージの払拭を目指した。この企画の着眼点と実施内容を以下に示す。

【STEP1 市民目線の体験フィールド選定】まずは福岡都市高速を街の教室と位置づけ、その中で最も市民が楽しめ、参加して良かったと思えるフィールドは何処かについて議論した。その結果、市民の代表ともいえる団体スタッフの全員から、福岡のランドマーク的存在の荒津大橋(写真1)の主塔の頂上へ登り、福岡を眺める事は過去に市民が体験した例がなく、是非そこへ行きたいという意見を得た。そこで、管理者側の都合で安全に行ける場所、リスクが少ない場所を優先して選定する手法ではなく、市民代表の声を優先した体験フィールドの選定を行なった。

【STEP2 徹底した安全対策の検討】主塔断面は 2.0m×3.0m であり、高さは路面から 60m、海面から約 100m ある。頂上に行くには、その内部の梯子を登る必要がある。そこで、セーフティーブロックなどの墜落防止措置を全ての梯子に設置する等、入念な安全対策を計画した。更に実施にあたっては、自らがロープに吊られて点検を行なっている特殊高所技術の職員にサポートスタッフとして参加することで、緊急事態の救助に備えた。また、これらの計画に対して、職員による予行演習を3回行い、十分な安全面の確認を行なった上で、実施への最終判断を行なった。

【STEP3 興味を引くタイトルの設定】検討の過程で、重要視したのがタイトルであった。興味を引き、内容を知るきっかけとなるタイトルかどうかには主眼を置いて、議論を行なった。その結果「大人のアスレチック 未体験ゾーンへようこそ。福岡一高い橋に登ろう！」に決定した。特筆すべきは維持管理に関連する言葉を一切使用しなかった事にある。これにより、一般的な土木イベントにありがちな堅苦しさが大きく軽減された。ちなみに土木技術者で考えた案は「市民都市高速橋守 養成講座」等であった。

【STEP4 さりげないストーリーの設定】参加する過程の中で押し付けではなく、自然に維持管理の重要性を認識し、最終的に都市高速への愛着を持ってもらう事ができるよう、イベント全体にストーリー性を持たせることを配慮した。そこで、前述したタイトル以外の事前会告も探検という表現にとどめ、当日のガイダンスで初めて橋守の仕事と維持管理の重要性を紹介した。そして、参加者に橋守として現地へ出発すると告げた。また、主塔に辿り着くまでに、正にアスレチックのように梯子や金網の上、箱桁内部(写真-2)を移動する約 650m の区間を設



写真-1 福岡都市高速 荒津大橋



写真-2 箱桁内の移動状況

キーワード 維持管理, 広報, 橋守, 市民参加, 都市高速

連絡先 〒812-0055 福岡市東区東浜 2-7-53 福岡北九州高速道路公社 保全施設部 保全管理課 TEL 092-631-3285

定し、道中で**写真-3**に示すような腐食の実態等を紹介した。その後、主塔の頂上まで梯子で登り、**写真-4**の福岡の街を一望しながら達成感を感じてもらった上でワークショップ会場へ移動する事とした。

【STEP5 ティータイムの設定】ワークショップ会場へ移動後、班行動での時間的誤差を調整する事を兼ねてティータイムを設定した。共に現場での体験を行なった上で雑談は、その後のワークショップでの話し易い連帯感を創出した。

【STEP6 想像しやすいワークショップ】ワークショップは間に対して班での意見を集約して、模造紙を用いてプレゼンテーションを行なうというシンプルなものとした。その際に土木イベントが陥りやすい専門用語の羅列や、一方的な議論の誘導を防止する目的で、土木技術者が考えたシナリオに対して、事前に団体スタッフの意見での修正を加えた。これにより、現場後の疲れた状態でも想像しやすい間の設定ができ、自然体での自由な意見交換が実現した。**写真-5**にこの状況を示す。

【STEP7 想像しない結末】全てのプログラムが終了した際に、参加者は維持管理の重要性を学び、都市高速に愛着を感じているため、**写真-6**に示すように市民都市高速橋守としての認定証を授与した。そして、この認定証の中には、橋や道路の変状に気付いた際に道路緊急ダイヤル#9910へ通報するという役割を記載した。この事はこの時まで一切告知しなかったため、より鮮明な記憶を与えた。

3. 結果の考察 上述した企画を実施した結果、終始参加者からは笑顔が溢れ、ワークショップでも活発な意見交換が行なわれた。以下にこの企画に関する考察を示す。

【市民との協調性の創出】市民と管理者が同じ目線で楽しみ、現場体験を共有することで、信頼関係が生まれた。その上で市民都市高速橋守に任命するという演出により、都市高速に愛着を持ち、管理者と共に見守るという意識を持ってもらう事ができた。終了後に実施した4段階評価の満足度調査において、参加者全員から満点の評価を受領した。また、後日参加者の数名から頂戴したスタッフ宛のお礼メールには、「市民都市高速橋守」の署名が記載されていた。

【情報感度の高い市民の参加】社会的意識の高い市民2000人以上が登録する団体の授業として実施したことにより、情報感度の高い市民の参加を促した。これにより、当日の様子はSNS等を介してリアルタイムで多くの人々に発信された。マスメディアのみならず、このような広報効果を得られるツールの活用も、今後は視野に入れる必要がある。

【斬新なアイデアの取得】市民と同じ目線での直接対話を実施する事で、前向きで斬新なアイデアを多数引き出す事ができた。これにより、更なる企画案が生まれ、発展的継続が見込める事がわかった。

【質の高い企画による注目度向上】これまでの土木技術者のみで企画するイベントとは異なり、質の高い企画であったことにより、報道関係者の同行取材も入り、テレビのニュースでは7分間に渡って、当日の様子は維持管理の重要性について特集の形で報道された。また、新聞でも紹介された。

【時間の誤差に注意が必要】実施では2.5時間もの時間超過が発生した。入念に準備したが、市民の方の興味は至る所に向かい、時間超過に気付いても安全管理に手を抜く事はできないため、回復は出来なかった。この点は、計画段階での甘さと言わざるを得ない。今後は十分な時間の余裕を考慮する必要がある。

4. おわりに 今回、市民の代表といえる団体と共同で維持管理広報の取組みを実施した事で、既往の土木系イベントにない双方向でのコミュニケーションを実現し、質の高い広報効果を得る事ができたと実感している。既往の一方通行の広報から、質の高い広報を目指していくには、更にこのような活動を継続的に実施・改善していく事が重要と考える。最後に本企画の立案、実施にご協力頂いた全ての機関、団体、企業の皆様に感謝の意を表す。



写真-3 桁端部の腐食損傷



写真-4 主塔の頂上からの景色



写真-5 ワークショップ状況



写真-6 市民都市高速橋守 任命式